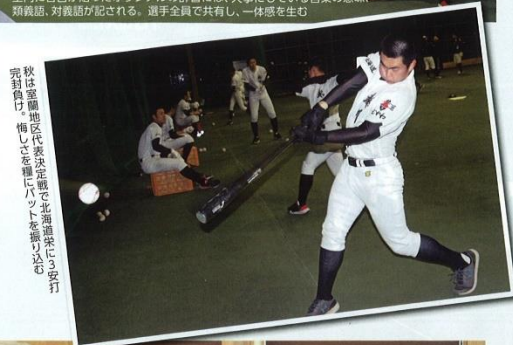




室内に各自が貼ったオリジナルの旗書には、大事にしている言葉の意味、頑張る、対戦者が記される。選手全員で共有し、一体感を生む



秋は室蘭地区代表決定戦で北海道東に3安打完封負け。悔しさを奮いバットを振り込む



恩師の佐藤氏の写真を持つ鬼海監督

部長にバトンタッチ
甲子園効果は大きかった。センバツ直後の02年の新入部員は例年の倍となる32人。行政の補助金が出て、二一ルハウスの室内練習場(30坪×36坪)が完成。マン7白を並べ、冬期も数多く打ち込めるようになった。秋の道優勝を飾り、04、09年にはセンバツに返り咲いた。聖地に3度導いた佐藤茂富監督が19年夏に逝去したが、鬼海監督は「勝ち負け以上のものを何が残すことができれば、意味がある」と恩師の教

えを後輩たちに伝えてきた。被災から2年余りが過ぎ、部員29人は1月に仮設寮から完成した新しい寮に引越した。4月からは02年センバツ時に部長だった小池啓之氏(69)が監督を務める。ナインはあの時のような強打のチームを目指し、厳しい冬もバットを振り込んだ。主将の山崎航生(3)は「鶴川は夏の甲子園には行ったことがないので、新しい歴史を作りたい。灼熱の聖地に、全力疾走でさわやかな風を吹かせる。」

21世紀枠で選出された後、甲子園に出場した学校

選出年	学 校 (都道府県)	甲子園出場
2001	宜野座 (沖縄)	01年夏、03年春
02	鶴川 (北海道)	04年春、09年春
08	華陵 (山口)	09年夏
09	藤根東 (滋賀)	13年夏、17年夏、18年春
	利府 (宮城)	14年夏
10	山形中央 (山形)	10年夏、13年春、14年夏
13	土佐 (高知)	16年春

[注] 21世紀枠の以前に藤根東は春2度、土佐は春夏通算10度出場

2021年にセンバツ21世紀枠が21年目を迎えた。これまで同枠で出場した3校の現状を追った。

21年目の
21世紀枠



震災復興にも全力疾走

監督で鶴川を3度甲子園に導いた佐藤茂富氏のモットー「元気・本気・一気」を掲げる部員たち

当時のエースが指揮

2018年9月6日、胆振東部地震で学校のあるむかわ町は震度6強に見舞われた。グラウンドの防球ネットは倒れ、寮は半壊。1週間後の秋季大会では初戦敗退を喫した。それでも、下を向かなかった。「何か自分たちにできることはありますか」。避難所で共同生活を送った部員たちは、率先して復興に向けたボランティア活動に取り組んだ。目標は甲子園。目的は人間力の向上。21世紀枠で得た財産を受け継ぐナインには自然な行動だった。名物のシヤモとタンポポの群生地で見られる小さな町が沸き立ったのは、



重りを持ち上げ、パワーアップを図る



2002年のセンバツ1回戦。三木(兵庫)に対し、大会タイ記録の1イニング3三塁打など15安打を放ち、両校計30安打の打撃戦を12-8で制した。甲子園初出場勝利は道勢春夏通算80勝目のおまけだった。町民栄誉賞が贈られるフイバーだった。

鬼海将監督(36)は当時のエース右腕。「秋の道8強なので、自分たちは甲子園で大恥をかくんじゃないか」と選ばれた当初は不安に駆られた。それでも、4番の池田剛基(元・日本ハム)らと普段通りの打ち勝つスタイルを貫いた。攻守交代時にもモーターの「全力疾走」を徹底。閉会式では日本高野連の牧野直隆会長に「鶴川の全力疾走は高校野球のお手本」と称えられた。



◆鶴川(むかわ町) 1952年、北海道苫小牧高鶴川分校として創立。76年、北海道立に移管し全日創設通科校に。野球部は88年創部。甲子園に春3度出場し、通算2勝3敗。部員29人(3年15人、2年14人)。主軸OBは池田剛基(元・日本ハム)。

2002年センバツ1回戦

三木 001 002 401 | 8

鶴川 406 020 00x | 12

(三) 本岡、園田、井上-福田
(鶴) 鬼海-中村



2002年センバツ出場を記念にアオダモ 10本を植樹



新しい寮が昨年12月に完成し、1月に引越した